

# 八八の年祝い

としらわ

昔々、真夏のある夜のことです。奄美の海で、男が漁をしていました。すると、後ろでなにやら声がします。

「村に男の子が産まれたぞ。だが、八歳までの命じゃな」と言っています。

「神様がヤンハズをさしたんだ」と、男は思いました。子どもが産まれると神様たちがすぐにその子の運命を決めると信じられていて、そのことを「ヤンハズをさす」と言うのです。

男は「自分の子どもではないだろうか」と思いました。実は、わが子が今日明日にも産まれるはずなのです。もう漁どころではなくすぐさま家に帰りました。すると、家中大騒ぎ、子どもがたつた今、生まれたということです。男は息せききつて、「男か、女か、どちらだ」と聞きました。

「男の子だよ。ほれ、あんなに元気だ」という返事に、がつくりしてしまいました。それでも、気をとりに直して、「今晚生まれた赤子は、ほかにおらんか」と聞き



ました。しかし、そういう家はどこにもなく、「ああ、やっぱり、あれはわが子のことか」と思い、しばらく考え込みました。それから、家の中にはいると、紙に八八と書きました。そうして、子どもの顔を見た後、そとそその紙を寝床の下に敷いたのです。

次の夜、漁師は同じところに漁に行きました。すると、二人の神様が話をしています。「昨夜は、私一人でヤンハズをさしたよ。八歳までしか生きられないという運命だ」「いや、あなたは間違った運をつけたね。あの子は八八まで生きるだろうよ。寝床にそう書いてある」

「えーっ。そんなはずはないんだが。しかたがない。願いどおりにしてあげよう」これを聞いた漁師は「よかった」と喜んで家に帰りました。子どもは八歳を過ぎて何事もなく元気に育ち、八八歳まで長生きしました。

それからというもの、八八歳になると八月八日に盛大なお祝いをするようになったという事です。

(原話 大和村 福島 ナヲマツ)  
文／有馬英子 絵／二石綱夫